

学 位 論 文 の 要 旨

学位記番号	甲 第 55 号	氏 名	中西由香里
論文題目	幼小接続での言語活動における学校司書の役割 The role of school librarians in language activities in the connection between kindergarten and elementary		

1. 研究にあたっての問題意識

近年、幼児教育・保育の国際的な研究成果により、幼児期からの質の高い教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培うとされ、すべての子どもに対する「質」の高い教育が求められている。こうした社会の変化の中で、我が国においても乳幼児期からの教育が重要とみなされ、親や地域コミュニティを支える財政、社会、労働政策等、教育が公正に受けられる効果的な施策が推進されている。

日本においては、中央教育審議会が 2016 年に、幼児期からの教育を重視した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を公表している。この答申では、「社会に開かれた教育課程」のなかで学校と社会が連携、協働しながら子どもたちを育み、新しい時代に必要とされる資質や能力の実現を目指すとしている。こうした状況を踏まえ、2017 年 3 月告示の『幼稚園教育要領』（文部科学省）では、小学校の生活や学習の基盤の育成に繋がることに配慮し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を示している。教育要領では、幼児の発達を踏まえた言語環境を整え言語活動の充実を図ることが重視されている。また、上記答申において、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあることが指摘されている。このため保育教諭は、幼児教育の段階から言語環境を整え小学校の教員と共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図ることが求められている。

また、2017 年 3 月告示の『小学校学習指導要領』（文部科学省）総則では、児童の発達段階に応じた言語能力の育成を図ることが求められており、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて児童の言語活動を充実するための授業改善が重視された。そのため、学校図書館を計画的に利用し、その機能の活用を図り児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に活かすことが明示されたのである。これは、児童の言語活動の育成において、教員が学校図書館を利活用する学習方法が有効であることを示したものと理解できる。

これまでも小学校や中学校、高等学校の教育実践現場では、学校図書館の利用や学校司書との協働が行われている。しかし、幼児教育の実践現場では、小学校や中学校、高等学校のように学校司書からの支援や学校図書館からの協力体制は整っていない。学校図書館を利用し学校段階間のつながりを考えた場合、幼児期からの質の高い教育を行う場として、多様な絵本や様々な資料が置かれている学校図書館での活動は、幼児や児童が言葉に出会う場としてふさわしいと思われる。

2. 研究の目的

これからの学校教育は、学校図書館を活用した幼小、小中、中高といった学校段階間の円滑な接続や教科等横断的な学習を重視する教育が求められる。しかしながら、幼児教育の実践現場では、義務教育学校や高等学校のように学校図書館の専門職員と保育教諭による協働体制は整っていない。国際的な動向を踏まえ、「質」の高い教育が課題とされているが幼小接続での言語活動は、保育教諭と学校司書による読み聞かせ交流に留まっていた。

また、文部科学省の管轄している学校に幼稚園も含まれているものの、学校図書館の専門職員である司書教諭や学校司書と保育教諭との協働に関する研究は進んでいない。そこで本研究では、これからの幼小接続での言語活動の可能性に着目し、学習の場として利用の促進がなされている学校図書館を前提として、学校司書の役割を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、「チームとしての学校」の専門職の一員という観点から、幼小接続での言語活動に着目して学校司書の役割を検討した。これまでの学校司書の現状や幼小連携・接続の状況を把握するために、文献調査と質問紙調査により整理した。また、海外の School Library Media Specialist (以下、「SLMS」) の組織内での位置づけや保育教諭と SLMS による協働、ティーム・ティーチング Team Teaching (以下、「TT」) での先行事例を得るため、インタビューによる予備調査を行った。その結果を踏まえ、SLMS の職務及び役割を文献調査により検討した。加えて、幼小接続カリキュラムについて文献調査を行った。先行研究や事例分析結果から SLMS の役割についての示唆を得て、学校司書関わった幼小接続実践を小学校教育からの視点と幼児教育からの視点で実施し、会話分析調査、質問紙調査、並びにインタビュー調査により学校司書の役割を検証した。

4. 結果と考察

一連の調査結果から、学校司書が幼小接続での言語活動に関わることで、学区コミュニティとの連携、保育教諭への学校司書からの支援に貢献できることが明らかとなった。また、学校司書が学区との連携によって幼小接続実践を可能にした要因として 2 つのことを挙げることができた。1 つ目は、自治体の体制と人の連携である。2 つ目は、園長と校長のリーダーシップである。

1 つ目は、学校司書が幼小接続での言語活動に関わる際、自治体が独自に幼稚園と保育所を「こども園」として一体的に運用していたため、複雑な幼児教育施設との異校種接続が容易になった。また、公共図書館に教育委員会から担当者が配属されており、教育センターの図書館担当指導主事と連携が図りやすい。こうした学校図書館と公共図書館との連携協力体制が整えられた環境が重要であることがわかった。

2 つ目は、園長と校長のリーダーシップである。勤務校の校長は、学校司書が自治体の教育委員会に直接雇用されているため、直接指導が可能であった。そのため、校長のリーダー

様式 B

シップのもとで学校司書は、学校図書館の専門職員として校内の組織に位置付けられ、「幼小連携教育委員会」のメンバーに参画できた。こうした園長と校長のリーダーシップにより、学校司書は学校から園に出向き幼小接続実践に職務を果たすことができた。

学校司書が教育活動に関わる効果については、学校司書が幼小接続に対する明確な意識を持つことが大事である。学校司書が、図書館情報学の知識を基盤として、司書、教員、心理士、研究者の4つ視点から5つの観点を往還しながら幼小接続に参画することが有効とされた。それにより、授業の質向上による教育効果、教員の事務負担の軽減、学校資源の有効活用に貢献できる結果が得られた。

幼小接続において効果的な言語活動を促進するために、学校司書が認識しておくべき5つの役割は、[1] 幼児教育と学校教育の教育要領・保育指針を理解して、[2] 教科のねらいや単元目標等を踏まえた上で教材を選定して、[3] 教員や保育教諭と積極的に協働する。本研究成果からTTとして授業に参画することが有効であることがわかった。そして、[4] 学校図書館での休み時間の対応も含め、[5] 実践を検証していきながら幼小接続に関わることである。それにより、言語活動での授業の「質」向上に繋がる。

[1] 幼児教育と学校教育の教育要領・保育指針を理解

学校司書が、司書と教員の視点から幼児教育と小学校の学習指導要領や保育指針を理解していることで、幼児期と学童期に見合ったカリキュラムや指導方法を保育教諭や教員に提案できた。幼小接続を日本で実践する場合、幼児期では遊びを基盤としたカリキュラムが有効であることから、本研究では、オランダの「ピラミッド・プログラム」を提案した。小学校では、教科の単元目標が達成でき主体的な学習に繋がる「フィードバックモデル」を提案した。また、先行研究で有効とされた、幼小単元計画、単元目標、ねらいを確認し、共通の「めあて」を決めて実践を行うことで幼小接続が円滑になることも明らかにした。

[2] 要領・指針ねらい単元目標等を踏まえた上で教材を選定

学校図書館は、児童生徒並びに教職員が利用する場である。学校司書は教員が授業の準備をしたり、教材研究を行ったりすることができるように物的、人的環境を整えることが重要である。しかし、幼児教育施設では、図書室が整備されていないところもある。園長と校長がリーダーシップを発揮すれば、小学校の学校司書が園に出向き教材選定に貢献できると考えた。このように学校司書が、教材、授業づくりの段階から保育教諭や教員と協働を図ったことで、教材を深く理解し、教材としてよく練られたものが幼児や児童のもとに届き、教育の質に繋がることを明らかにした。特に、幼小接続で「領域」と「教科」を繋げる場合、要領・指針のねらいや単元目標等を確認した上で、教材を検討できる能力が学校司書に求められることがわかった。つまり、司書の視点と教員の視点が必要である。

[3] 教員、保育教諭との協働、TTによる授業への参画

学校司書がTTとして授業に参画するうえでは、司書、教員、心理士、研究者の視点からの協力が求められる。学校司書がエビデンスに基づき教育活動を振り返り、教材を媒介として教員に働きかけることは研究者の視点での参画である。対象となる子どもの発達を理解したうえでTTとして関わることは心理士の視点で参画している。教育目標を達成できたか

様式 B

確認することは教員の視点で授業に参画している。学校司書が授業に関わることは、教材と子どもの知識を繋ぐ経験につながり、教材をとおして読み方を探究する子どもの姿を捉える視点は司書の視点である。学校司書が授業に関わる効果は、4つの視点を働かせながら学校司書が授業に参画していることで教育活動に貢献していた。

[4] 学校図書館での休み時間の対応

学校図書館は、授業で使用する場合もあるが休み時間に児童が過ごす場所でもある。学校図書館には学校の中で、評価を伴わない学校司書がいる場所でもある。授業だけの関わりではなく単元の見通しをもち、子ども同士の協働が必然的に生まれる状況を学校図書館から創りだしていくことも可能である。休み時間の児童の様子を教員に伝え、連携を図ることも可能であった。学校司書が個を尊重して関わったことで、幼児にとって、安心できる人的環境として年中児の頃からの顔見知りの学校司書が小学校の学校図書館にいたことで、幼児は安心感と期待感が高まった。幼小接続においても人的環境を含めた言語環境を整えて、言語活動を行うことは心理士の視点である。

[5] 実践を検証する能力

教育現場で重視されている PDCA サイクルに当てはめると、これからの学校司書に求められることは、実践を図書館情報学の視点で検証し、保育教諭や教員に伝えることができる能力を兼ね備えていることが重要である。つまり、学校司書は「チームとしての学校」の専門職員として教育活動に関わり、検証しながら授業に参画することが期待されていた。

日本では、本研究時点で学校司書が幼児教育と小学校教育を結ぶ言語活用能力育成のための教育実践を検証した成果がいまだ見られなかった。

5 今後の課題

本研究は「チームとしての学校」の専門職の一員という観点から、幼小接続での言語活動に限定して学校司書の役割を明らかにした。本研究での実践は、調査範囲も限られた自治体での調査であり量的に限界がある。したがって、調査結果の分析で明らかとなった問題点や可能性についての検証が十分に行われているとはいえない。本研究で確認することができた諸問題について、規模を拡大した幼小接続での学校司書との協働による実践や調査を実施することによって、本研究結果に基づく成果を、さらに一般化することが可能となり、実践の蓄積も豊かになるであろう。

本研究をまとめているさなか、学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議において「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」が発表された。学校図書館がデジタル化の中で、読書・学習・情報センターとして十分に機能を果たすことができるように、学校図書館を核とした「ラーニング・コモンズ」の有効性が示された。しかし、こうした学校図書館を担う人については具体的な記述は見られなかった。本研究の成果を反映させることで、学校司書が学校図書館を核とした教育活動に貢献できると考えられる。